



●書籍のご購入や内容等については最寄りの書店や発行元にお問い合わせ下さい



『ジェネレーティブ AIの衝撃』

馬淵邦美 著

日経 BP 刊

定価 2,420円 (本体2,200円+税)

ジェネレーティブ(生成)AIとは、蓄積データを活用してテキストや画像などの新情報を作成できる高度なAI(人工知能)システムのことだ。対話型AIのChatGPTがこの生成AIを使ったサービスで、利用者との対話を重ねることで受け答えの精度が上がる。質問への回答だけでなく文章の要約や翻訳も手掛け、ビジネスのアイデアも出してくれるとあって、同サービスを資料作成や顧客への提案に活用する企業や自治体が増えている。

本書は、生成AIが産業界にどのように広がり、どのような影響を与えるか、また生成AIの有効利用のためにどうすればよいかをまとめている。

AIの社会実装が急速に進み、私たちの働き方や生き方に大きな影響を与え始めた今、生成AIの概念や類型、用途や運用のための倫理・法規定の動きをわかりやすく説明している本書の一読をぜひすすめたい。

学識者やデジタルクリエイター、企業のAI推進担当者へのインタビューも収録されていて、読めばAIの隆盛に驚かされる。

本書が展望するのはAIとの補完関係による産業の生産性向上だ。AIの影響を特に強く受ける職種として法務、経理、金融・ファイナンス・保険、プログラマー、デザイナーなどをあげ、今後は業務の効率化とビジネスの見通しやそれに基づく計画作成をAIに頼り、人間はコミュニケーション能力、倫理や規制を考慮する力などのAIにない非認知能力を活かして最終的な意思決定の主体であり続けるべきとしている。

高齢化による人手不足の農業現場にもAIが浸透し始めた。AIが作物管理をすることで生産性が向上できる一方で、AIを導入できる農家と技術革新から取り残される小規模農家との格差を広げることにもなる。と国内外で懸念も浮かんでいる。農業はAIにどう対峙するべきなのか、本書を手掛かりに熟考してみたい。

(日本農業新聞 齋藤 花)